



キャンパス / 大阪府茨木市(茨木安威キャンパス、茨木総持寺キャンパス) 学生数 / 8,632人 創立 / 1966年  
 教育理念 / 独立自強・社会有為(どくりつじきょう・しゃかいゆうい)  
 学部 / 文、国際、心理、社会、法、経済、経営、地域創造  
 大学院 / 経営・経済、心理学、現代社会文化  
 THE 日本大学ランキング2023 / 201+位

## 長期構想2040「文理にまたがる学問領域を担う総合大学としての地位を確立」 多様な価値観や異文化を持つ学院生と教職員が世界中から集うイノベーションの源泉であり続ける。

### 学部・学科の構成

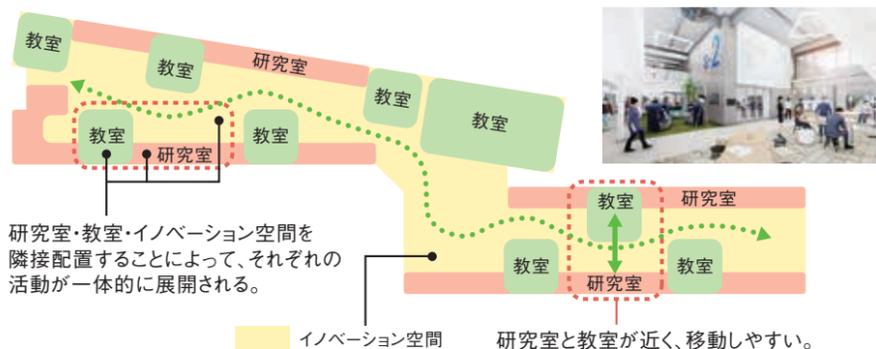
※赤字は2019年度以降に新設された専攻

学部	学科	専攻
文学部	人文学科	日本文学専攻、歴史文化専攻、 <b>美学・建築文化専攻</b>
国際学部	国際学科	グローバルスタディーズ専攻、国際文化専攻
心理学部	心理学科	心理学専攻、 <b>人工知能・認知科学専攻</b>
社会学部	社会学科	社会学専攻、スポーツ文化学専攻
法学部	法律学科	—
経済学部	経済学科	—
経営学部	経営学科	経営・マーケティング専攻、ビジネス法務専攻、ビジネス心理専攻、 <b>情報システム専攻</b>
地域創造学部	地域創造学科	—
理工学部*	数理・データサイエンス学科、機械工学科、電気・電子工学科、情報工学科(いずれも仮称)	

\*2025年度設置構想中

### 茨木総持寺キャンパスの 新校舎イメージ

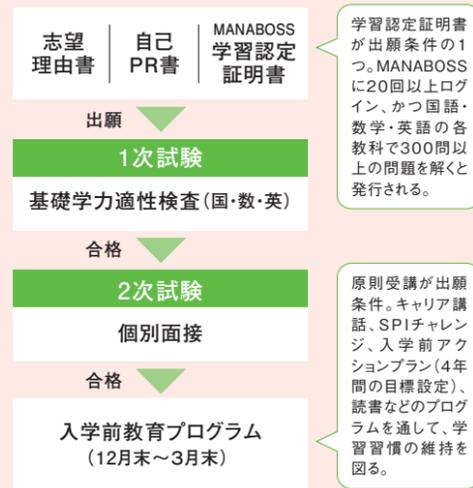
教室と研究室を互い違いに配置。  
 イノベーション空間と一体化させ、  
 学び合い、教え合いの協働を促す。



## 注目 学習習慣の育成・継続を図る入試へと 転換したアサーティブ入試

2014年度に文部科学省のAP事業\*に採択されたアサーティブ入試。当時は高校生に大学で学ぶ目的を考えさせ、大学で学ぶ姿勢と意欲を持つように育てるプログラムと一体化した育成型入試だったが、その後、学習面を重視した入試へと進化している。現在は「事前学習」「学力試験」「入学前教育プログラム」の流れで実施。事前学習では、基礎学力確認・養成システム「MANABOSS」に20回以上ログインし、英語・国語・数学の各教科で300問以上の問題を解くことを求める。これは試験対策ではなく、学習習慣をつけることと、苦手な分野を特定して克服することが目的だ。合格後の入学前教育プログラムは、4年間の目標設定や基礎学力・学習習慣の維持を目的とする。このように学習習慣の育成・定着を重視する入試に転換した理由は、意欲だけでは入学後の学修で挫折しがちだからだ。「大事なものは4年間しっかり学び続けて、意欲が高い状態で社会に出てもらうこと。そのために入試区分と入学後の学修データ、意欲の高さを分析して、常に入試の見直しを図っていく」(真銅学長)。

### アサーティブ入試のしくみ



\*大学教育再生加速プログラム

# 全学部“混然”のキャンパスで 主体的な学びを“必然”に

CASE STUDY

## 追手門学院大学

2025年度に初の理系学部となる理工学部(仮称)の新設を構想中の追手門学院大学。近年、矢継ぎ早に改組・新設を行う背景と、めざす教育改革の方向性を学長に聞く。



学長 真銅 正宏

しんどうまさひろ ● 1985年神戸大学文学部卒業、1992年同大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。1994年徳島大学総合科学部助教授。2001年同志社大学文学部教授。2015年追手門学院大学国際教養学部教授。2017年副学長。2020年より現職。

### 文理を超えた学びに 不可欠な理工学部の新設

本学は近年、改組・学部新設を積極的に行ってきました。2021年度にAIを学ぶ人工知能・認知科学専攻を心理学部に設置、2022年度には国際教養学部を国際学部と文学部の学部学科に改組し、文学部の中に美学・建築文化専攻を設けました。本年度は法学部をスタートさせ、理工学部も設置準備中です。

一連の改組・新設の狙いは、文理を超えた学びの実現です。既存の専門の枠にとらわれていては、新しいものは生まれません。高校の探究学習で文理を問わない学びが、すでに始まっています。縦割りの学びでは、学生は物足りなく感じるでしょう。そのため、文系学部しかなかった本学にとって、理工学部新設の構想は文理を超え

た学びの実現に不可欠でした。理工学部新設と同時期にII期棟を建設。茨木総持寺キャンパスをメインキャンパス化し、すべての学生が茨木総持寺キャンパスで交流できる環境にしていきたい。これで、学ぶ環境が文理融合になります。私は、異質なものがぶつかり合って新しい価値を生み出すためには、「偶然性」が大切だと考えています。現在、茨木総持寺キャンパスに建設中の新校舎は、南北250メートルもあります。教室と教員の研究室を同フロアに互いに配置し、広い廊下に机や椅子を置いてイノベーション空間とし、学部を超えた学生の学び合いや、教員と学生との日常的な議論を促すなど、偶然の出会いを誘発する設計にしました。

法学部設置前に8000人程度だった学生数は、理工学部完成年度に1万人程度まで増える見通しです。18歳人口減少が加速する中、拡大路線とも言える戦略ですが、理工学部新設は本学にとって新たなマーケットの開拓であり、伸びしろはまだあると考えています。加えて、大阪は西日本でも最大の人口を抱えています。今のうちに教育改革を進め、関西エリアにおける新たなポジションを築いていく考えです。

### 教育DXでめざすのは 学生の未来図の可視化

学生の主体的な学びを支援すべく、教育DXを進めています。狙いは、データによる学修成果の可視化です。学生が自身の成長を把握し、学び方を見直せるよう、学修時間やテストの得点率、学修の進捗率などを自動収集するLMSを導入しました。そして、学生の未来図の可視化のため、将来は、卒業生の進路に関するデータも取り込み、AIなどを活用し、希望進路実現のために必要な活動や科目履修について、モデルを示すようなくし、学生の構築をめざしたい。

私は、社会変化の影響を最も大きく受けるのは中規模大学だと考えています。成熟期に入った大規模大学は大きく動く必要がなく、特定のジャンルに強みを持つ小規模大学はその道を極めればよい。しかし、中規模大学は変化を肯定的に捉え、社会ニーズにピットに合わせなければ、立ち行かなくなってしまう。今後の発展可能性を考えると、理系学部はさらに増やしたい。大学院の充実も検討中で、ニーズを分析して、より発展させていきたい。変化に柔軟に対応し、さらなる教学改革を推進していきます。

取材・文 / 本間学 撮影 / 安田新之助